



まえた あきひろ
＜前田 昭博 氏の略歴＞

- ・1954年 鳥取県生まれ
- ・1977年 大阪芸術大学工芸科陶芸専攻卒業
- ・1991年 第11回日本陶芸展「毎日新聞社賞」受賞
- ・1999年 「日本の工芸(今)100選」展招待出品「パリ」
- ・2000年 第47回日本伝統工芸展「朝日新聞社賞」受賞
- ・2003年 20回記念田部美術館大賞「茶の湯の造形」展大賞受賞
- ・2003年 第50回日本伝統工芸展「第50回展記念賞」受賞
- ・2005年 第60回新匠工芸展「60回記念大賞」受賞
- ・2007年 紫綬褒章受章
- ・2010年 鳥取県文化功労賞受賞
- ・2013年 国の重要無形文化財「白磁」保持者に認定(人間国宝)



* 事前の宿題: 日本橋三越で開催(4/11~17)された「重要無形文化財保持者 前田昭博 白瓷譜(はくじふ)展を鑑賞しておくこと。

＜講演内容＞

■ 陶芸の道に進んだきっかけ

- ・小学2~3年生の頃、学校の教員だった父が木版画を始めた。
- ・その後ろ姿を見ていると、とても楽しそう。モノを夢中になって作る姿は羨ましいなと思った。
 - * 父のは板目を活かした木版画、一生懸命彫刻刀で掘ったところが白で何も無い⇒そこに余白の「美」を感じた
- ・その頃から図画工作が好きになって高校で美術部に、大学は大阪の美術大学で陶芸専攻。
- ・ロクロの実習の時、2週間やったがうまく行かなかった。
 - ⇒ 落ち込んでしばらく離れた後、もう一度トライ。実習室で2週間奮闘するもダメ。
 - ⇒ しかし3週間目になって手とロクロと土が同期するようになって盃とかが出来るようになり、楽しくなった。
 - ⇒ それで毎日実習室に入るようになり、大学3年になると大きな壺も挽けるようになった。



■ 陶芸の道に進んだきっかけ～続き

- ・大学では、先生が大きな土の塊と格闘している姿に感動。
- ・自分で初めて**白磁**を作って、**自然の「白」とマッチ**している事が魅力。
 - * 白磁用の土は普通の粘土と違って、うまく引き上げられない
- ・4年生の卒業制作で、毎日のように実習室に入って白磁を独学で挽いていた。
⇒ やっと30cm強の壺が挽けるようになった⇒ 好きなものが見つかった
- ・できれば好きな磁器を続けたいと先生に相談。
⇒ 先生曰く「一生は一回きり、好きなことがあればやるべきだ。」
- ・でも内心好きな事だけやっても続かない、とも思っていた。
⇒ 先生が「**戦後30年、好きなことをやって飢え死にした人はいない。**」
「もし前田君が好きなことをやって飢え死にしたら、記録に残るぞ。」
⇒ この言葉で気が楽になった。
- ・卒業と同時に鳥取に帰って、納屋を改装してロクロとかの設備を入れ、工房に。



■ 鳥取での仕事

- ・でもいざやってみると、割れやキズが出て上手く行かない。
⇒ 周りに聞ける人がいないので、独学でトライ&エラーを繰り返して徐々に上達。
- ・それでも毎年、個展と全国規模のコンクールに出品を続け、大卒後14年経った頃、大賞に次ぐ優秀賞を受賞。
⇒ これで一生陶芸を続けられると思った。
- ・当時、技術がない中で「**こんなものを作りたい。**」という**想**があった。
(想があっても技がついてこなかった)
- ・考えようによっては、最初からクリエイターというか創作的な仕事をやってきた。

■ 「伝統」

- ・「**伝統**」=「継承」とかではなく、「**創作の連続**」。
- ・完成度の高いものを敢えて壊して創り上げる。





■「制作工程」

- ・白瓷を制作する前に必ず「イメージ」: スケッチブックにアウトラインを書いたりして、ここから作業が始まる。
- ・白磁用の土は天草からの取り寄せ。(普通の粘土と違い石を砕いた土)
- ・その土を荒もみ⇒ 菊もみ(これで空気を押し出す)⇒ ロクロで挽く
⇒ ある程度形になったら、離れたところから全体の形を見る(ロクロを挽くところで作品の6~7割は決まる)
⇒ 翌日か翌々日に面取り⇒ 最後に板で叩いた⇒ ヒビ(失敗)
↳ 今では指で押さえる
- ⇒ 乾燥させた後、磁器用カンナで削る⇒ 紙ペーパーで擦る⇒ ステンレスの板などでエッジを処理

■「工芸」=「美」と「わざ」

- ・「美」⇒ 想い、「わざ(技術)」⇒ 技法(ex. ロクロ)、思想⇒ 身体の錬磨
- ・削り方、面の取り方、線の引き方、etc. 全て作家の個性が出ている。
- ・焼き物が炎に包まれている状態=還元状態の焼き方
- ・4日目に窯出しをするが、いつも期待通りとはいかない。
- ・ロクロはただ薄くするだけではなく、ほどほどの厚みを持たすことも出来る。



■「私の考える白瓷」

- ① かたちの美しさ
- ② 省略・簡素
 - * 白磁は元々中国の唐の時代に誕生、それから模様は小紋⇒無紋になっていく
- ③ 間合い・余白
 - * 作り過ぎない・説明的にならない
- ④ 光と影が織りなす陰影
 - * 山陰の柔らかな日差し、もしくは障子越しの光
- ⑤ 創造と想像(クリエイティブ&イマジネーション)
- ⑥ 存在感(力)と品格
 - * これらが無いと・・・、単に白いだけでは白瓷ではない





■「風土と制作環境」

・それまで鳥取は制作環境としてあまり良くないと思っていたが、ある展覧会でお客様から「**鳥取で作ることで何か秘策があるのでしょうか？**」と聞かれ、ハッと気づかされた。

* 山陰&独学⇒ 焼き物の肌がしっとり、聞く相手がいないから独自。

* また**雪の白がお手本**⇒ 氷と違ってぬくもり、少し青みもある。

・それまで作品は自分の個性だと思っていたが、環境が大きい事を実感。

・陶芸の産地だと、無駄をもっと省けたと思っていたが、むしろ“**鳥取の風土こそが私の個性を作った**”と。

・4年前、狂言師の野村萬先生(萬斎の兄)とお話した折、その頃自分はこれで良いのか？と悩んでいたが、先生が「**色々な事を聞いてもそれを直ぐ喋らず、お腹に飲み込んで体中に漲らせ、最後に足の先から出すようにすると良い。**」と言われ、私も同じようにやって来たなあ。



やなせ窯のある故郷の風景



■「まとめ」

・20歳ごろは何の取り柄もない、ただ“**素直**”と“**続ける**”の二つしかない自分が、「一生は一度きり。」とか「鳥取に何か秘密があるのでは？」などの言葉が原動力になり、ここまでやって来れた。

・色んな言葉や出会い、経験など、バラバラの「点」であったものが全て繋がるようになり、多くの失敗(傷や壊れ)も無駄ではなかった。孔子曰く「50にして天命を知る。」私も60にしてこう言う事が分かるようになった。

■「西郷 工芸の里」(パンフレット参照)

・色んな工芸家がひとつの地域に集まることで、お互いに切磋琢磨し、助け合い、またお客さんも集まってくれる。

<Q & A / Comment>

片平: 何のために、普段お話をされない前田さんに来てもらって、皆さんに集まってもらったか。それは先生の生き方・言葉から一つでも共感することを持ち帰ってもらいたいからで、今日は皆さん、いくつも持ち帰る事になったと思います。

Q: 「伝統とは継承でなく、新しく創作。」と言われたが、その元となるものは何か？

A: 中国から白磁は伝わったが、まずは学んで、そして壊そうとしても壊れないものもあり、変えられるものもある。**伝統あるものは中々壊せない。下手をすると自分が壊される。**



<Q & A / Comment> ~続き

Q: 今日のお話は全て納得・共感できたのですが、一つだけ「えっ」と思ったのがデッサンの話。芸術家は体が勝手に動くと思っていたが、デッサンをする時にはどういう風に考えているのか？

A: デッサンは必ず毎回やっているワケではないが、やはりお客様にどう受け取ってもらうか。こういうものを・・・という想いを強くイメージしてからスタートしている。

片平: 以前工房にお邪魔した際、「大きな作品の時は3ヶ月ほど集中する。具体的な事を細かく意識するのではなく、全体をイメージ、後は一気に。」と仰っていました。

A: 離れて見て、デッサンの紙よりもその時の集中力が大事。実際作る時は無意識。

Q: 「作品を見ただけで前田のものと同様なものを作りたい。」と仰っていましたが、最終目標は？

A: 工芸品なので“**気に入って使ってもらう事**”。

Q: 伝統文化とかを若者に理解してもらうような動きをされていますか？

A: 逆にどうしたら若者にも理解してもらえるか、教えてほしい。日用品に「美」を求めてきたのは日本だけ。今は自分の精一杯で良いものを作ることかな。

片平: 今日をきっかけに、君たち若者が感動を伝えて広めればよい。

Q: 敢えて「白磁」ではなく「**白瓷**」という漢字を使うのはどういうこだわり？

A: 普通は「磁」を使うが、これだと硬い(クラフト的イメージが強いので...)。元々中国では「瓷」なので、むしろ「磁」は日本だけ。私は自分の作品をクラフト的な硬いものではなく、柔らかなイメージにしたいので「瓷」を使っている。

Q: なぜ続けられたのか？やめようと思ったことは？またその時にどういう考えで続けられたのか？

A: 迷った時はじっとしていた。ただ続けていた。才能のある人はすぐオブジェの方に移った。私はずっと器を作っていてよいものか、と迷ったものの、器を使って喜んでくれる人がいるし、器の中にオブジェ的なものを作れると確信していたので。

片平: 壺にしてもカップにしても、口の部分のカーブが「**舞妓さんの唇のよう**」と評された方(安梅先生)がいますが、正に言い得て妙。オブジェですよ。

【最後に】

今日のお話も「ブランド育成とどういう関係があるのか？」と思う方もいるかもしれませんが、お話の中で“私の考える白瓷”を6つのキーワードで表現されました。皆さんも是非自分の仕事を3つぐらいのキーワードで表してみることをお勧めします。



<感想> 宿題の「白瓷譜展」を鑑賞した後のお話だったので、つくづく作品に作り手の人柄が表れるものだな、と感心しました。また「伝統はそう簡単に壊せるものではなく、下手をするとこっちが壊される」と言われたのも、西陣織の細尾さんが「壊そうとしても壊れないのが伝統の強さ」と言われた事と重なり、思わず膝を打ちました。